

秋の夜の長物語

「それ春の花の樹頭にのぼるは上求菩提の機をすゝめ、秋の月の水底にくだるは下化衆生の相をあらはす。天いふことなくしてはぶつとみな之をえめす。人こゝろありては何つとめざらむや。もし人ありて人間の入苦をみてさいどをいとふときは、煩惱即ち菩提となる。天上の五衰を聞きて淨土をもとむる時は、生死即ち涅槃となる。かるが故に諸佛菩薩、玄ゆつ逆の化道をたると、罪あるをば邪より正に入れ、縁なきをば惡より善に赴かしめ給ふ。何を以ていふとなれば、經論の所説書傳に載する所えげれば申すにことばたらず。近比耳にふれことのあまりに哀にもたつとかりしかば、面々に枕をそばだてたまへ。老のねぎめに秋の夜の長物語ひとつ申し侍らむ。後堀河の院の御宇に、西山の瞻西上人とて道學兼備したりし人、元は北嶺東塔のしゆ徒に勸學院の宰相の律師桂海といふ人にてぞおはしける。内には玉泉のながれを酌んで四教三觀の月をすまし、外には黃石が道を踏みて囊沙背水の風をかへげたり。ある時はにんにくの衣の袖に攝取の慈悲をつゝみ、或時は碎伏の劍のやきばのうへに忿怒のゆ鋭をふるふ。誠に眞俗の倚るゐ文武の達人なり。けい年の頃、花のちる春の暮をみてねぬ夜の夢やさめたりけむ。こはそも何事ぞや。われたまたま俗塵の境界をはなれて釋氏の門室に入りながらわけくれはたい名聞利ようにのみして出離生死のつとめにをこたり

ぬるあさましかりける事かなと思ふ心出できにければ、やがて山より山の奥をも尋ね、柴の庵のまばしばかりの隠れがをも結ばいやおもひけるが、さすがにふるさんのつなぐ所は人ごとと離れがたきならひなれば、伊王山王の結縁も棄てがたく堂坊同侶のわかれもさすがに名残をしかりければ、心ばかりにあらましていたづらに月日を送りける。その心の内に動き、詞の外にあらはれけるにや、朝々暮々風塵の底失脚してはあやまつて三十年生ず、孰の日か人間榮辱のまなこ悠然としてはせんじゆかんうんに眠るらむ、これほどに思ひ立ちぬることのかなはぬはいかさま邪魔外道の我をさまたぐるにや、さらば佛菩薩の擁護をたのみてこの願を成就せむとおもひて、石山に詣でつゝ一七日があひだは五體を地になげて一心に誠をいたして、道心堅固そくせうひまやう菩提とぞ祈りける。七日満じける夜、らいばんを枕として少しまどろみたる夢に、錦のと帳の内より、容顔美麗なるちこのいはひかたなく見えたるがたち出で、ちりまがへる花の木陰にやすらひたれば、あをばがちに縫物したる水干の、遠山に花ふたゝびさきて、雪のごとくにふりかゝりたりけるを袖につゝみながら、いづちへ行くともおぼえぬに、暮れゆく色に消えて見えすなりぬと見て夢はさめぬ。これすなはち所願成就の夢相なりと嬉しくおぼえて、まだまのゝめも明けぬまに立ちかへりぬ。よそより來たるべきものを待つやうに今や道心おこると待ち居たれば、なほ山深く住まばやと思ひし心はわすれて、夢に見えたるちこのおもかげとさのはども身をはなれず。律師もまことのうつゝならねばせむかたなきおもひに堪へかねて、さてもやもしなぐさむと、

一つの香をたきては佛前にむかへば、漢の李夫人返魂の香けぶりにむせびて身をこがし給ひし武帝の御思ひも身にまられ、くら山の花はころびて雲底によれば、巫山の神女が雲となり雨となりし夢のちのおもかげに、たづきもしらず歎きたまひけむやうだいの御涙もよそならず。山王の神託に「我一人のしゆ徒をうしなふは三尺の劔をさかさまに香むにことならず」とかなしみたまひしかば、われらがりんを、いかさま山王のをしみおほしめして、道心をさまたげさせ給ふにや、譬ひさやうのしゆ慮なりとも、命生きてこそ法燈のたい風に向ふところをもさまたげむすれ、暮まつ程の露の身もあらじ、今はとおもひわびけるが、石山の觀音をこそかこち申さめと思ひて又石山へこそ詣でけれ。三井寺の前を過ぎけるに、降るともまらぬ春雨の顔にはろほるとかゝりければ、まばらく立ちより、晴れまをまたむと思ひて金堂のかたへ行く程に、聖護院の御房の庭に老木の花のいろことなる梢垣にあまりて見えし。はるかに人家をみれば、「花あれば則ち入る」といふ詩のこゝろにひき入れられて、門のかたはらに立ちよりたれば、齡二八ばかりなるちどの、水魚干に薄紅のあこめかさねて、腰のまはりほけやかに、けまはし深くたをやかなるが、人ありとも知らざるにや、みすのうちより庭に立ち出で、ゆきおもげに咲きたる下枝の花を手折りて、

「ふる雨にぬるとも折らむやまざくらくものかへしの風もこそ吹け」とうちながめて、花の雫にたちぬれたるてい、これも花かとあやまたれて、さそふ風もやあらむとまづこゝろなければ、おほふばかりの袖もがなと、雲にも霞にもかすべきこゝちなどしけるに、心なき風

の門の扉をさきりと吹きならしたるに、あくる人あるやと怪みて見やりて、花を手にもちながらかゝりのもとをめぐりて遙にあゆみけるに、みるぶさの如くにて、ゆらゆらとかゝりたる髪の毛のすぢ、柳の絲にうちまとはれてひきとめたるを、はればれと見かへりたる目つき顔のにはひはかりなきやう、ゆくへなく我をまよはしつる夢のたゞちに少しもたがはねば、今のうつゝにみし夜の夢はうちわすれて、日くれけれどもゆくべき方をもおぼえず。その夜は金堂の様にひれふしてよもすがらながめわびぬ。

「これや夢ありしやうつゝわきかねていづれに迷ふ心なるらむ」。夜あくれば又昨日の所に行きて御坊の傍にたゝすみたるに、わらはのいとさよげなるが、ぬきすのゑたの水すてむとて門の外まで出でたり。これや昨日のちこの童なるらむと思ひて、立ちよりつゝ、「ちと物申し候はむ」といへば、「何事にて候ふやらむ」とてことの外なるけしきもなし。律師うれしく思ひて、「昨日この院に水魚しやの水干めされて御年の程十六七ばかりに見えさせ給ふをさあ人の御ことや知りまゐらせ給ふ」と問へば、わらはうちゑみて、「我こそその御方に召しつかはるゝものにて候へ。御名をば梅若君と申し候ふ。御里は花園の大臣殿にて御わたり候ふ。御心わくかたなくいつはりのある世とだにもおぼしめされぬ程の御心、あてにて候へば、一寺の老僧若輩春におくれたる一本の花を見てはよそに散るゝるもなくなり、秋の月のくまなきには皆我が家のひかりをあらそふふせにて候ふを、この御所の御ありさまあまりにゆるす方なく御座候ふほどに、管絃すかのむしろならでは御出も候はず。たいいつと

なく深き窓にむかひては、詩を作り歌をよみて目をくらし、夜をあかされたまひ候ふぞや」とどかたりける。聞くにつけてもいと心もちかれぬれば、やがてこの童をたよりにて、壺の石ぶみつてにても心のおくを知らせばやと思へども、あまりにひたけたらむもさすがなれば石山へまゐりつゝ、又わが山へぞかへりける。律師は夢かうつゝかのおもかげに、起きもせず寝もせでなげきくらし、おもひあかしけるが、聖護院の御坊の邊にひかし知りたりし人のあるをたづねいだして、ある時は詩歌の會にことよせ、又ある時は酒宴に興じたるていにて、一夜二夜をあかす事度々になりけり。その後さきの童をかたらひよせて、茶をのみ酒をたゝへてあそびけるついでに、こがねのうち枝のたちはなにたきものをいれて、ねりぬき、からわや、ふせんりよう、色々の小袖十がさね贈りたり。童もはや志の深き色を見てよろづ心を隔てぬさまなりけり。さて梅若君に思ひまよへる心のやみいつはるべしとおぼえぬよしを語りければ、「まづ御文をあそばしてたまはり候へ。やがて申して見候はむ」とぞ申しける。思ふ心をつくす程の言の葉はいかにくろみすぐるともありがたければ、歌ばかりにて、

「まらせばやはの見し花のおもかげに立ちそふ雲のまよふ心を」とかきておくりける。わらは文を懷より取り出して、「これ御覽候へ。いつぞや雨のたえまの花の陰にたちぬれて御わたり候ひけるを、ある人はのかに見まゐらせて、人知れず思ひそめたる袖の色もはや紅にふかくなりて、なくばかりにつゝみかねて候ふやうに見え候ふぞや」と語れば、梅若君顔う

ちあかめて文のひもを解かむとしたまひけるところに、出世なるなにがしの僧都とやらむいふ人のみすをかゝけて内へ入るに、見せじとて袖のうちにおしかくせば、重びんぎあしとひまを待ちて目くるゝまで祇候したるに、書院の窓より返事書きてたびたり。童手も輕くうれしくて急ぎもちて行きたるに、律師めもあやによるこびて、誠に身もあらぬさまのていなり。ひらきて見ればことばはなくて、

「たのますよ人のこゝろの花の色あだなる雲のかゝるまよひは」。律師このへんじを見て、心いとうかれしかば更にたちかへるべき心もせず。あひ見ぬさきのわかれだにもせむかたなくおぼえしかば、まばしあたりのやどになほもといまり、よそながらそなたの梢をも見つゝくらさばやとは思へども、あまりにそれもひたゝけたれば「又こそ参りさふらはめ。うれしくもかよふ心のあるべとならせ給ひぬるものかな」とわらはにいとま乞ひつゝ、律師山へ歸りけるが、一わしあゆみてはみかへり、二わしあゆみてはたちといまりしける程に、春の日ながしといへども程近き坂本のさと坊まで行きつかで目くれにければ、戸津のへんにありけるはにふのこ屋にぞといまりける。夜もすがら思ひあかして、あしたになれば山へのぼらひとて庭まで出でたれども、千引の繩を腰につけたるが如く、我ならぬ心にひきといめられければ、又引きかへして大津の方へぞあてがれ行く。雨まめやかに降りければ、簑笠うちきて、旅人のすがたに身をやつしつゝ行くところ、からかささしかけたる馬のりの道にて行きあひたり。誰なるらむと見やりたりければ、梅若君のなかだちせし童にてぞありけ

る。律師を見て、「あなふしぎや、申すべき事ありて知らぬ山までも尋ねまゐらむと云つるに、嬉しく参りあひたるものかな」とて、馬より飛びおりて律師が手をとりにて、かたはらなる辻堂へぞ立ちよりける。「さて何事にか」と問へば、童ふところより、色にこがれたるもみぢがさねの薄葉に、手さへくゆるばかりなる文をとり出して、「いかなる山に道迷ふとも、きしばかりをゑるべにてたづねてまゐれと仰せさふらひつる。けしからずの御心まよひぞや。まして一夜の後の御袖のうへ、さこそは露のたはぶれ」とうちわらへば、律師も「せめてわかれを歎く身とならず」とたはぶれかよはして、文を見れば、

「いつはりのある世と知らずで契りけむわが心さへうらめしのみや」。御所のかたはらに、知りたるしゆ徒の坊のさふらへば、それにまばらく御座さふらひて、御すだれのひまをも御心にかけられさふらへかし」と童まきりにいざなへば、思ふかたに心ひかれて、律師又三井寺にゆきぬ。童まばしの程宿かりて、ある坊の學問所におきければ、その坊主もねんごろなるさまにて、いろいろのいとなみなどありて、常にはちごどもをわまたいたして、管絃をし、はうへんの歌合などして日を送りける。律師は所願の事ありて新羅大明神に七日參籠するよしをいひて、夜にあれば院家のかたはらに立ちまぎれて、つき山の松の木かげ前栽の草の底にかくれて居たるに、ちごどもはや心えたるけしきにて、人めもがなとながめたるやうなれども、かなはで出でかねたる心づくし、見るもなかなか苦しければ、よしやたいよそながら見るばかりを、わが身にある契にて、人のなさけをこそ命にせめと思へば、あしはやく

行きてはかへり、かへりてはゆき、よなよな日かず十日あまりにもなりにけり。いつまでも
 と人はいへども、長居せむ事もさすがなれば、明くる日はわが山へかへりなむと思ひけると
 ころに、童きたりて、「今宵こそあの御所へ京よりきやく人御入り候ひて、御酒宴にて候ひつ
 るに、門主もいたく御酔ひ候へば、更けするまでかへられでまこうせられよ。これへしの
 びやかに御いり候ふべしと仰せられ候ひつるぞ。門さゝで必ず御待ち候ふべし」といそがし
 げにいひすて、歸りけり。律師これを聞きて、心うかれみだれて、いづくにある我が身とも
 覺えず。更けゆく鐘のつくづくと月の西にめぐるまで待ちかねたる所に、からかきの戸を人
 のあくる音するに、書院の杉障子より遙に見いだしたるに、例の童さきにたちて、ぎよなふ
 の提灯に螢をいれてともしたり。その光かすかなるに、このちと錦紗の水干なよやかにうち
 しをれたるていにて、見る人もやかゝりのもとにやすらひたれば、亂れかゝるあをやぎの
 いといふばかりなきさまに見えたるに、律師いつしか心たよたよしくて、ある身ともおぼ
 えず。童提灯をさそうの軒にかけて書院の戸をほとほとたゝきて、「これに御わたり候ふや
 らむ」と案内すれば、律師いふべきかたをも知らず、ちとかたはらに身をそばむる氣色にて
 あるよしをぞ知せける。童又庭にたちかへり、「はや御入り候へ」と申せば、ちとは先だちて
 妻戸をならす。その袖のうつり香も身にふるゝばかりよりそひて、うちかたぶきたれば、嬋
 娟たる秋の蟬のはつもとゆひ、婉轉たる娥眉のまゆすみのにはひ、花にもねたまれ、月にも
 そねまれぬべき白のかはばせ千々のこゑ、繪にかくとも筆もおよびがたく、語るに言葉なか

るべし。涙と共に枕をかはしまの、水のながれもたえず、猶契るべきむつこともまだつきな
くも團寒くして、らんふうの夢さめ、連理の花わかれてとやめがたければ、まの、小笹の一
ふしに明けぬと告ぐる鳥の音もうらめしく、おのがきぬぎぬひやゝかになりて立ちわかれ
などするに、明方の月の窓の西より隈なくもさし入りたれば、ねみだれ髪のはらはるとかゝ
りたるはづれより、眉のにはひはけやかにほのかなる顔のおもかげいろふかく見ゆるさま、
別れてのおももかげに、又逢ふまでを待つほどのいのちあるべしとおぼえず。律師はちこ
をおくりて曉出でたりつるまゝにて、いまだうちへも入りもせず、門のからいしきの上に立
ちかねて居たるところに、重きたりて、「御文」とてさしいだしたり。あけてみればさしもお
はからず。

「我が袖にやどしやはてむきぬぎぬの涙にわけしありわけの月」。律師、書院にかへりて、
返歌、

「共に見し月をなごりの袖の露はらはで幾夜なげきあかさむ」。律師は夢うつゝかとだに
も思ひもわかざりつる面影を身にふれ、そへつる袖のうつり香を、わがものからかたみにて
やまへかへりたれども、心まをれ魂うかれてよろづの人の物いへどもへんじもせず、おぼえ
ぬ涙人めにあまりておさふべき袖もくちはてぬべければ、ちといたはることありと披露し
て、人に對面もせず臥しまづみてぞ日をおくりける。童、このよしをつたへきゝて梅若君に
かくと語り申しければ、わか君も誠になくことゝ苦しさことに思ひくづはれて、御けしき常

よりもうちしをれ給ひぬ。今もや昔づれあると、まばしは心にこめてまち給ひけるが、あまりに日のかすふりければ童をよびよせて、「さてもありし夜の夢のたうちもうつゝすくなきには、おどろかすたよりもなくて程經ぬれば、たがかたのつらさにならでは、そのまゝにやがて遠ざかるべき。風の心ちとやらむきこえしかば、露の命もいかなりぬらむ。もしはかなくなりなば、なからむ跡をとひてもそのかひなし。いかならむ山の奥なりとも尋ねゆかばやと思へども、申しおく事なくてまかりなば、門主の御こゝろもさこそとおもはれてそれもかなはず。行くへもまらぬあだ人のたゞいひすてしことの葉を、まことがほにてわれに心をつけしもたがせしわざぞや。今のはどにも我をまゐるべして、いかなる虎ふす野邊ありともたづねてゆけ」とかこち給へば、さすがにまだいとけなきあだし心に、またなく人に思ひつきぬるは忘るゝわざもなきならひなれば、げにことわりやと童思ひ知りて、「その人のありとこそをば委しくうけたまはりて候へば、御供申し候はむ。御所の御意あしく候はゞ後に何とも申させ給ひ候へ」とて、ちと童と唯二人、行くべきかたをもまらず立ち出でにけり。君はもとよりも三台九きよくの家に生れて、香車あつばの中ならでは、假にも未泥土を歩み給ふ事なれば、こゝにやすみかしこに立ちといまり、更に歩みかねさせ給ひけり。童あまりのいたはしさに、「あはれ、天狗ばけ物なりともわれらをとりにて比叡の山へのぼせよかし」といひて、唐崎の松の木陰にて休み居たるところに、年のいとたけたる山伏の四方でしに乗りたりけるが、輿を前にかきすすゑさせて、「これはいづくよりいづちへ御渡り候ふやらむ」といひけ

れば、わらは、ありのまゝに答へける。山伏與よりおりて、「我こそ御尋ね候ふ房の隣へまかりのぼるものにて候へ。あまりに御いたはしく見參らせ候へば、我はかちにて歩み候はむ」と、「この與にめし候へ」とてちごと童とをかき乗せて、力者十二人鳥のとぶが如くに行きけるが、茫々たる湖水の上、漫々たる雲霞の中をわけて、片時のあひだに大嶺の釋迦の嶽といふところへどかきもて行きにける。こゝに磐石をたゝへたる石の牢の中に、おしこめて置きたれば、月日の光も見えず夜晝のさかひもなし。同族男女のかずありとおぼえて、たゞ泣く聲のみを聞えにける。その夜より、若君うせさせたまひたることたゞならずと、門主おはきに御なげきありて、いたらぬくまもなく御尋ねありけれども、その行くへいづちへとも知りたる人さちになかりけるところに、東坂本より大津へとほる旅人のありけるが行きあひて、「さやらのをさあひ人わらは一人めし具して、昨日の夜の戌の刻ばかりに、唐崎の方へこそ御わたり候ひしか」とぞかたりける。「さてはこのあひだれなれを忍びていひ通はす律師のありと聞えしが、いかさまとりてける」とて、院家のうち申すに及ばず、一寺のしゆ徒うつたつ事なのめならず。山門へよせむずすることはかなふべからず。父のおとやも知り給はぬ事はよもあらし。まづ花園の左府の邸へおしよせ恨み申せ」とて御門徒の大しゆ五百よ人は白晝に左府の邸三條京極へおしよせて一つものこさず焼きはらふ。圍城寺のしゆ徒これにて猶憤を散せず一山一同詮議しけるは、「寺門の耻辱これに過ぐべからず。所詮このついでを以て當寺に城廓をかまへ、三摩耶戒壇をたてば山門の大しゆ定めておし寄せむすらむ。これ

即ち地の利につきて敵を滅すはかりと、又は邪しみを退けて戒法を弘むる道たるべし。天て
 時に時をあたへたり。しばらくもとやこほるべからず。一み同心のしゆ徒三千よ人如意越
 を所々掘りきり籠にさかもぎをひき、まゝがきまげく結ひまはして、三摩耶戒壇をぞたてら
 れける。山門にはこれを聞きてなじかは蜂起せざるべき。かいだんのことには、園城寺へ發向
 すること以前既に六ヶ度なり。くげに奏し武家にもれ、訴ふるまでもあるべからず。時をう
 つさずおしよせて焼きはらへ」とて末寺末社三千七百三ヶ所へふれおくる。先づ近國の勢は
 せあつまりて、その勢都合二十萬七千餘人とぞあるしける。十月十四日、申の申の日にあた
 れり。「これに過ぎたるよき日あるべからず」とて院々堂々の勢を七手にわけて又卯の刻に
 おしよする。あるひは漫々たる志賀辛崎の濱路に駒にむちうつしゆ徒もあり、あるひは渺々
 たる烟波湖水のあさなぎに、舟に棹さす大しゆもあり。思ひ思ひによせけるその中に桂海律
 師は、この濫觴、まかしながら我が身より事をおこすわざはひなれば、人より先に一合戦し
 てかばねを戦場にともめむとおもひ、すぐりたる同宿若黨五百よ人、まだまのゝめもわけぬ
 まに如意が谷よりぞよせたりける。さるほどに明くれば十四日の辰の刻に、大手搦手、城中
 總じて二十萬七千餘人、同時にときをあげてをめきさけぶ。たい山もくづれ湖水もかたむき
 て忽ちにこんりんさいさいまで落つるかと思はる。死するをも顧みず攻めいりにける。寄手には
 しゆせん前司くわつさう院、すきしやうさいせうこんりん院、させんせうさやうめうくわ
 ん院、杉本山本さいれん房、さいたうには、しやうきせうしつせんみやうばう、なんかいさい

みやうきたみつ、いきやうちうしやうりん房、横川には、せんほうせんちうや院、三塔峰起して機をあはす。之を防ぐ大しゆ圓満院のおにつる、かたう院のてんぐう、千人斬のあらさぬき、かなまたの悪大夫、八方やぶりの武藏房、三町つぶてのさやう一房、さびきりこのみのそふちやう房、互に命を惜まず入れかへ入れかへあひ戦ふ。寄手はおは勢なれば討たるゝをもかへりみず。防手は案内者なりければ、こゝかしこのつまりつまりに寄せあはせ、おひたちおひたち相戦ふ。三時はかりの合戦に、よせて三千餘人手をおひて、半死半生なりければ、城の内いよいよ勝つに乗つて、手ささをまはしうちいづる。かくてはこのさやうじんみらいさいをふるとも、おとしつべしとも見えざる間、桂海大きに怒りて申しけるは、「山門よりこの寺へ寄せて攻めし事既に六度かとなり。毎度の戦これに劣らずといへども、これほどに攻めかねたる事いまだなし。いくほどもなき堀一つ死人にてうめたらむに、などかこの城攻め破らざらむ」とくわうけんしやけん、堀の底せばなる中へがばととびおり、二町あまりに見えたるさりざしの上へへだてのさんを踏みてはねあがり、ぬりまはしたる塀柱に手うちかけ、ゆらりとね越えて、敵三百餘人のなかへみだれ入りて火花をちらしてぞきつたりける。さげざり、けさがけ、車切をむきてもてる一刃、あざりてすゝむ追かけざり、將泰たふしのはらひざり、磯うつ波のまくりざり、らんもん、菱形、蜘蛛手、かく繩、四角八方を切りてまはりけるに、如意越を防ぎけるつはもの三百よ人、足をもためず追ひたてられ、思ひ思ひにおちて行く。桂海がどうしゆくわかたう五百よ人、走りちりて、院々堂々に火をかくる、風忽ちに吹ひ

て四方におほひければ、金堂、講堂、鐘樓、經藏、常行三昧の阿彌陀堂、普賢堂、ぎやうくわんに
はほうとう、けいたい、まやうの御本坊、智證大師の御影堂、三門跡の御坊にいたるまで、總
じて三千六百よ、一時にけふりとなりはて、新羅大明神の社壇より外は、殘る所一つもな
かりけり。さる程に若君、三井寺のかやうになりぬるをも知り給はず、石の窄の中におしこ
められて、わけくれ歎き沈みておはしける處に、天狗どもあつまりて四方山の物語して笑ひ
けるが、「われらがおもしろきと思ふことは、焼亡辻風小いさかひ論の相撲、白川はこのそら
ぬんし、山門南都のみ興ぶり、五山の僧のもんだふだて、是等にこそは興ある見物もいでき
て、一風情ありと思ひつるに、昨日三井寺の合戦は、きたいの見事かな」と申せば、そばなる
天狗「かしこくこそ。この梅若君をとりたりけるぞや。さらすばこれほどの軍はいでまじ。ま
やうと院の門主たち、かなたこなたへ逃げさせ給ふをかしさに、われこそ興がる歌をよみて
さふらふ」といへば、そばなる天狗、「何とよみたる」と問へば、

「うかりけるはち三井でらのありさまやかいつくりてはねをのみでなくとよみて候ひつ
る」とかたれば、座中の天狗ども、皆名つばに入りてぞ笑ひける。若君はこれを開き給うて、
あなあさましや、さては三井寺われゆゑにはるびにけるにやと思ひ給へども、くはしく問ふ
べき人もなし。たゞ童と共にうちわびて、なくより外のこともなし。若君かくばかり、

「じやくまくの苔のまづくに袖ぬれて涙の雨のかわくまどなき」。かゝりけるところに、
淡路の國のまゐもつとて、八十ばかりなる老翁の鬢髪いとまろくやせたりけるを、たかてこ

てにいましめてこれも石の牢の内へ入れたり。一兩日ありてこの翁、ちごと童の泣きかなし
むを見て、「若しその御袖やぬれて候ふ」と問へば、ちごと童も共に「すみなれし所を、かりそ
めながらたちいで、この石の牢におしこめられて候へば、父母師匠のなげき思ひやらるゝ
たびごとに、涙落ちずといふ事なければ、さこそは袖もぬれ候ふらめ」と答へける。老翁大
きによろこびて、「さ候はゞわれにとりつかせたまへ。たやすく故郷へつけまゐらせむ」とて
翁、このちごの袖をまぼるて見るに、まら玉かなにぞと人のとふばかりに涙の露またゝりた
り。翁この露を左の手に入れてくすりをくわんする如くにするに、露の玉ほどなく鞠の大き
さになりぬ。これを又二つにわけ、さうのたなごゝろに入れて暫くゆるがし居たるに、二つ
の露次第に大きになりて、石の牢のうち皆たうたうたる大水になりけり。この時に老翁俄
に大蛇になりて、雷電のつゝみ地をうごかし、いなびかりの光天にひらめく。さしもきせい
の天狗どもおぢわなゝきて四方に逃げうせければ、龍王石の牢をけやぶりて、ちごと童との
みならず、あらゆる所のだうぞく男女雲にのせて内裏の舊跡神泉苑のはとりにておろした
りけり。だうぞく男女皆これより別れて、おのがさまさまにかへりぬ。若君と童とは我が故
郷をたづねて花園へ行きたまひたれば、瓦をならべて造りたりし宮殿樓閣、みな焼野の原と
なりて事聞ふべき人もなし。あたりなる僧房にて事のやうを尋ねとへば、「左大臣殿は、さん
だちわか君を、比叡の山へうばゝれさせ給ひ候ふを、御里にまゐらしめされぬ事はあらじと
て、三井寺よりおしよせて焼き拂ひて候ふなり」とぞ語りける。おとゝの御行くへとはむ程、

直ちよるべき宿もなければ、「さらば三井寺に行きて、門主の御事をも尋ね申さむ」とて、たどるたどる重に手をひかれて、三井寺に行きて見給へば、佛閣僧房一つも残らず焼き拂はれて、閑庭の艸の露になきかうさんの松風の吟する。これを我が住みしむかしのあとよとて見れば、石ずるの石も焼けくだけて苔の縁も紅にへんじ、軒端の梅も枝かれて袖なつかしき風もなし。物ごとにかはりはてぬる世のあはれ、たいわれゆゑなりしわざはひなれば、神慮にもたがひ人口にもさこそかゝるらめとあさましくおぼえて見るに目もあてられぬなごりをしみて、その夜は新羅大明神の御拜殿に湖水の月をながめてなきあかしつゝ、あやうご院はもし石山にや御座あるらむと、尋ね行きたれども、「これにも御座なし」と申せば、重さ候はい今宵は参詣の人の體にて本堂に御座候へ。それがし山へまかりのぼりて候ひて、律師の御坊をたづね申し候はむ」と申しければ、若君今はたいうご世にあらじとも深く思ひ定めたまふ御心ありて、よしやなかなかととりとひる人もなくば、心のまゝにいかなる淵にも身をまづめむと、嬉しくおぼしめし給ひてでなくなく文をかき給ふ。童御文とりて、山へ尋ねのぼりけるを、耳に見をに給ひ給ひける。それよりも山をさして急ぎける。律師童をうち見るよりも更にものもいひえず、さめざめとぞ泣きける。童も涙をおしのごひて、この間ありつる事ども語らむとすれば、「まづ御文を見候はむ」とておしひらきたるに、あやしきうたあり。

「わが身さてしづみはてなば深きせのそこまでらせ山の端の月」。律師いるをうしなひて、「これ御らん候へ。御歌の心もとなく候へば何事も道すがら御物語候へ。まづ急ぎまゐり

候はむ」とて坂本より先にたてゝ、とるものもとりあへず唯二人むちをあげてはせ行きける。大津を過ぎてゆくとゝろに、旅人あまた行きあひて、「あないたはしや。このちごいかなるうらみありてか身をなげたまふらむ。父母師匠いかに歎きたまはむすらむ」といひて通る。あやしやと思ひて、くはしく聞ひければ、旅人立ちとまりて、「唯今勢田の橋をわたり候ひつるところに、御年十六七に見えさせ給ひ候ひつるちごの、紅梅の小袖に水干の下ばかりめされて候ひしが、西にむかひて念佛十遍ばかり唱へて、御身をなげさせたまひ候ふほどに、あまりのいたはしさに我等やがて水に入り候ひて、その邊の淵の底までさがしもとめ申し候ひつれども、見えさせ給ひ候はぬほどに、力なくまかり過ぎ候ふなり」とかたりて涙をばらはらとぞこぼしける。旅人のかたるをきいて、年のほど衣裳のやう疑ふ所もなければ、律師も重もこゝろあきれ、足手もなえてふしぬべき心ちすれども、馬を早めて橋のつめに行きて見るに、いつも御身をはなさでかけ給ひし金襴の細をのまほりに、水晶の珠数とりそへて橋柱にかけられたり。これを見て律師も童も同じながれに身をまづめむとてたえこがれにけるを、どうまゆくわかとうあまたよりてといめければ、よしやその空しさ死骸なりとも一め見て後にこそともかくもならめと思ひて、二人は共に繋ぎすてたる小舟にのりて、深き淵の底をのぞきもとむれども更になし。わかたう、まも法師どもは皆はだかになりて、岩のはざま岸のかげまで残る所なきがしけれどもなし。かくて遙に時うつりて、供御の瀬といふ所までもとめくだりければ、せかれてとまるもみち葉のくれなる深き色かと見えて、岩の

かげに流れかゝりたるけしきのあるを、舟さしよせて見ければ、あるもむなしき顔にて、たけなる髪流るゝ藻にみだれかゝりて、岩こす波にゆられ居たり。なくなくとりあげて、顔をひざにかきのせたれば、ぬれて色こきくれないのまほしほとしたる、雪のごとくなる胸のあたりもひえはてぬ。亂れて残るまゆすみの色、こぼれてかゝりしみどりの髪わりなき顔はかはらねども、一たび笑めば百のこびありしまなじりもふさがりて、色變じぬれば、見るに目もあてられず語るにことばなかるべし。律師は顔を膝にかきのせて、天に仰ぎて泣きかなしむ。童、足をふところにいれて「われをばなど捨ておかせ給ひけるぞ」と地にふし悲びけれども、落花枝を辭して二たび花さくならひなく、残月西に傾きてまた中空にかへることなれば、さけぶ聲さへかれつきて、血の涙袖行く水とぞながれける。二人のおもひはいふにおよばず、同宿などのものまでもあたりの苦にふしまろびて、聲もをしますなきかなしむ。かくてさてもあるべきとならねば、その夜やがて近き山の鳥邊野にてむなしきけぶりとなし奉りてのち、同宿若黨はけぶりつきてかへれども、律師と童とはかへらずしてむなしき烟にひかひて三日まで泣きぬたりけるが、同じ苦にもうづもればやとは思へども、いまはのきはにのみて送り給ひし御歌に、そこまでてらせ山のはの月とありしは、なからむ跡をとぶらへとのためにてこそあれと思ひければ、こゝより山へも歸らず、そのゆる骨を頸にかけて山林とさうしけるが、後には西山岩倉に庵室をむすびてぞつとめ行ひける。童、髪をおろし高野山にぞとち籠りける。その後園城寺の三摩耶戒壇のちやうきやうのしゆ徒三十よ人、今はた

ちかへりて、住寺すべきやうもなかりければ、世の中もあぢきなくおぼえて皆離散せむと思ひけるが、今一度寺門の焼跡にたち歸り、内證しんしんの法施をもたてまつり發心執行のいとまをも申さばやと思ひて、みなみな新羅大明神の御前に通夜してこれをかぎりの法味をぞさへげゝる。夜ふくる程になりて、夢うつゝのさかひもしらぬに、東の方の虚空より馬を走らかし車をとろろかす聲して、おびたいしきさいにんかうかくの來り給ふいさほひあり。あやしく誰なるらむと、目もかれずこれを見れば、法務の大僧正にや見えたる、高僧四方興にのりて、まうそふの大しやう前後にいにうし或は衣冠正しき束帶の客、甲冑を帶せる隨兵を召しぐし、或は容色嬋娟たる婦人、たいけんの玉をかざりたるにのりて、ほうりをはき、さんれんのかぶり左右に相隨へり。跡にさがりたる仕丁に、「これはいかなる人にて御わたり候ふぞ」と問へば、「いまだしらせ給ひ候はずや。これこそ東坂本に御座候ふ日吉山王にて御わたり候へ」とぞ答へける。このしやうかく、皆こし車より御おりありて、幕のうちへ入り給へば、新羅大明神玉のかぶりを正しくし、威儀をかいつくるひ、金殿の中より出で給ふ。さてけんしやくのれいあり、ぶきよくのえんあり。新羅大明神玉のかぶりをかたぶけて、誠に御心たのしみ給へる御けしきにて、夜既にわけひとすれば山王還御なるに、明神寺門の外まで送り奉りて歸らせ給ひぬ。新羅大明神、玉のはしを御むゆみありて立ち歸らせ給ひける時、通夜の大衆一人、明神の御前にひざまづきて、涙を流して申しけるは、「三まやかいだんの事は、わわうの勅裁に任せ、我が寺の建立の事を存じて興行仕りしにて候へば一つもしゆ徒

のひが事とは存じ候はず。然るを山門みだりにたびたびの勅裁をそむき、種々の魔障をなして當寺を燒きはらひつれば、神明佛陀もそこそ御心をなやまさされ候ふらむところ存じて候ふに、當寺敵對の山門擁護の神、日吉山王に對して誠に御心よげにゑみをふくみたのしみをなさせ給ひ候ふは、いかなる神慮にて候ふやらむ、計りがたくてこそ存じ候へ」と申しければ、明神、通夜の大衆を御前に召されて「しゆ徒のうらみ申す所、委しくそのいはれあるに似たりといへども、これは皆一々の管見なり。それ神明佛陀の利生方便をたる、日、かれをめてして福をあたへ給ふも、えんじつの本意にはあらず。これをひして耻を行ふも慈悲のおもかりし故なり。唯しゆのぎやくの二さうを以て、終に無上菩提にいらしめむがためなれば、わがよろこぶところ、人いまだ知るべからず。佛閣僧房の燒けたるは造營するに財せつの利益あるべし。經論聖教の佛失したるは、これをえよしやの結縁たり。一爲の報佛豈生滅の相なからざらむや。たゞこれ亂りによりて桂海が發心してそくばくの化道をいたさむする事の嬉しさに萬事を忘れぬるをや。山王もこれのかんと給ふために來臨あり。我も感歎にたへずして歡喜の心をなしつるなり。石山の觀音の童男變化のとくと、誠にあり難き大慈悲なるをや」とおほせられて、明神、帳の内へ入らせ給ふとおぼゆれば、通夜の大衆三十よ一人一度に夢さめておなじさまにぞ語りける。さてはわか君の身なげ給ひしも觀音のえよへんなり、寺門の燒けたるも濟度の方便なりと、信心肝に銘しければ、三十餘人のしゆ徒皆發心して共に佛道を修行せむとてかの桂海、瞻西上人と名をかへて住み給ふ。岩倉の庵室へ行きて尋ね見れ

ば、「三間の草やなかばを雲にわけて、松の落葉を薪として、藤の菓を命にて、のこりの年を送り給ふ。浮世の夢さめざめとしてかくなむ。

「ひかし見し月のひかりを煮るべにてこよひや君が西にゆくらむ」と書院の壁に書きつけにけるを、御門かぎりなく叡感ありて、新古今の釋教の部にぞ入れさせ給ひける。徳かならずとやあることなれば、いとふとすれども同じさまなり。桑門の人、東西より來りあつまりて、都の近き處に寺をたて、人をも利やくせむとて、東山に雲居寺といふ御堂を建立して本尊に三尊來がうの儀をおこなふ。廿五の菩薩かやうにとのへて、往生人をむかひ給ふありさま、見る人信心を起さずといふとなし。おんこんくびすをつぎてこゝに來げいす。男女掌をあはせこれときやうらいす。佛のたねは縁よりおこることなれば、まことにたふとくとかたれば、聞く人皆涙をおとさずといふことなし。人間の行く末、尊きもいやしきも、後生を心かけ給はむこと肝要とこそ申し傳へけれ。

秋の夜の長物語

終